



Title	ドイツ語オノマトペの研究 : その音素導入契機と音素配列原理
Author(s)	乙政, 潤
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54320
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【29】

氏名	志 政 潤
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 23453 号
学位授与年月日	平成22年1月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	ドイツ語オノマトベの研究—その音素導入契機と音素配列原理—
論文審査委員	(主査) 教授 郡 史郎 (副査) 教授 細谷 行輝 教授 上田 功

論文内容の要旨

一般に言語記号に含まれる音と言語記号の意味の結びつきは恣意的であるとされるが、オノマトベの場合はその結びつきに必然性があると言われる。それは、言語音の表すイメージがオノマトベの意味に関わっているという意味である。そうは言っても、ドイツ語のオノマトベを観察しているといろいろな疑問が浮かぶ。例えば、日

本語の「どすん」という衝突音のオノマトベに相応するドイツ語のオノマトベは„bardauz“ [bar'daʊts]であるが、どうして有声破裂音の/b/で始まっているのだろうか。有声破裂音の/d/が含まれている理由は日本語のネイティブの語感に照らしても分かるような気がするものの、どうして第2綴りに配置されているのか気になる。また、末尾に/ts/という摩擦音が配置されているのはどうしてだろう。あるいはまた、アクセントを担う母音として/aʊ/が選ばれているのはなぜだろうか。この/aʊ/とbar-に含まれる母音音素/a/との関係はどのように説明したらよいだろう。本研究は、ドイツ語のオノマトベに含まれる音素とそれがもたらすイメージがオノマトベの意味とどのように関わっているかを明らかにしようとする—いわしくは、音素がオノマトベに導入される契機と音素がオノマトベの内部で配列される原理を確定しようとする試みである。

ドイツ語のオノマトベとして、語源的に„lautmalend/lautnachahmend“（擬声〔擬音〕の）と認められている約400個の単語を拾い出した。もっとも、ドイツ語の辞書は„lautmalend“という用語を幅広く解釈して、音響現象の本来的な模倣でない場合すらこの用語でカバーしている（例えば、plitz [plɪts], platz [plats] 「不意に」、plump [plʊmp] 「(太くて)不格好な(体つき・手など)」, wuseln [vu:zəlɪn] 「素早く、騒がしく、敏捷にあちこちと動き回る」）。最後の例には„lautnachahmend und bewegungsnachahmend“という説明が付いていることから、ドイツ語のオノマトベにも、日本語の場合とおなじく、いわゆる「擬態語」も含まれることが分かる。これらのオノマトベに加えて、ラングとは認められていないがコミックスで「擬音語／擬声語／擬態語」として使われた約500の単語を拾い出した。

ドイツ語のオノマトベの基本形は、1個の母音音素を核としてその前と後に各1個の子音音素を伴った構造を持つ間投詞であるが（例、tapp! [tap] 「とんとん」 [軽く打つ音]）、前か後の、あるいは前後両方の子音音素が複数である場合も多い（plauz! [plauʦ] 「どしん」、klaps! [klaps] 「びしゃっ」 [類などを叩く音]）。ほかにさらに後に派生語尾を伴って他の品詞になっている場合がかなりある（schnarchen [ʃnarçən] 「いびきをかく」）。しかし、母音音素を2個あるいは2個以上含んでいるオノマトベは極めて少数である（schwuppdwupp! [ʃvʊpdi'vʊp] 「ばっばっと」 [素早い動作を表す]、schnedderengteng! [ʃnedəreŋteŋ'teŋ] 「たったかたったか」 [ラッパの音]）。ドイツ語のオノマトベの大多数は、子音音素(群)+母音音素+子音音素(群)+（造語語尾）という構造を持っている。複数個の母音を含む場合、それぞれの母音音素にアクセントが置かれるのが普通である。アクセントを有する母音はオノマトベの音源の音色を表すが、母音音素を2個含みながらアクセントはどちらか1個の母音にしか置かれていない場合は、無アクセントの母音はそれに先行する子音音素の存在を際立たせるはたらきをすに過ぎない。

ラングとして認められているオノマトベには子音音素のみで成り立っているタイプは認められないが（pst! 「しっ」は間投詞であるが、„lautmalend/lautnachahmend“ではないのでオノマトベとは認められない）、コミックスに使われたオノマトベには子音音素だけで出来ているタイプがかなりある（例えば、WWSSMMMMM! 「ひゅーん」 [筋斗雲が飛ぶ音]）。また、コミックスでは「書き換え式のオノマトベ」（umschreibende Onomatopetika）がかなり好んで使われる。これはBUAAAA 「ウオー」と「遠吠え」を擬声語として表す代わりにheulen 「遠吠えをする」の語幹を独立させてHEULのように書き表すオノマトベである。Heulenは語源的に„lautmalend“とは説明されていないので、本来はオノマトベとして認めることはできないけれども、HEULは実際に使われていることを重視してオノマトベに数えた。

オノマトベの本質を„lautmalend/lautnachahmend“であるとする立場は、言語記号は恣意的であるという立場とは正反対の立場であって、言語音に意味を認める立場である。したがって、オノマトベを研究するとは言語音のイメージと擬声・擬音・擬態語の意味とのあいだの関わり合いを明らかにすることに他ならない。本研究の目的はそれゆえ、第一に、オノマトベに音素が導入される契機を原理的に明らかにすることにある。

ドイツ語の場合、オノマトベへの音素導入の原理は子音音素の場合と母音音素の場合とで異なる。子音音素は、通例、「音のジェスチュア」を契機としてオノマトベに導入される。「音のジェスチュア」とは舌や歯の発話器官が音源の特徴をジェスチュアによって模倣するために使われ、そのジェスチュアが言語音となって聞こえることを言う。間投詞paff! [paf] 「ばあん」（銃声）も、動詞pinken [pɪŋkən] 「かちんと叩く」も、おなじく動詞pusten [pu:stən] 「（風が）びゅうびゅう吹く」やpochen [pɔxən] 「とんとん叩く」も子音音素/p/で始まっているのは、これらの音源の現象がいずれもまずは「空気の破裂的な排除」で始まることを発話器官が「ジェスチュア」して模倣し、ドイツ語が有する言語音のうち無声閉鎖音・破裂音/p/の調音様式がその「ジェスチュア」にふさわしいと認められた結果、オノマトベの始発の子音に/p/が採用されたことを意味している。Paff!の語頭の/p/が破裂の「音

模倣」を契機としてオノマトベに導入されたと考えると、母音の後に続く子音素/*f*/の導入契機の説明に困ってしまう。*f*/もまた「空気の破裂的な排除」が終結を告げる段階に至ってなお「空気の漏出」が続いていることを表すため、これまた「音のジェスチュア」を契機として導入されたのである。もっとも、子音素が導入される契機が「音模倣」である場合がドイツ語にない訳ではない。しかし、それは動物の鳴き声のようなプリミティブなオノマトベに限られる。例えば*piep!* [pi:p]「びいびい」（鳥・雛鳥の鳴き声）。この場合、語頭の*p*/は「音模倣」を契機としてオノマトベに導入された。そのことは、母音素素に続く子音素としてふたたび語頭と同じ*p*/が導入されていることによっても証拠づけられる。

一方、母音素素は、ドイツ語のあらゆるオノマトベにおいて「音模倣」を契機として導入される。*Paff!*の*a*/は音源の明快な破裂の音色を、*pinken*の*/ɪ/*は音源の高らかに響く音色を、*pusten*の*/u:/*は持続する低い唸りの音色を、*pochen*の*/ɔ/*は暗いけれども強靱さを思わせる音源の音色を、それぞれ模倣する役割を担っている。ただ、*pardauz!* [par'daʊts]における*a*/はアクセントを担っていないので、音源の音色を再現するはたらきはしない。このオノマトベではそれは母音素素*/aɔ/*の任務である。*a*/は「空気の破裂的な排除」をジェスチュアするために導入された*p*/の存在をなおいっそう明確にする目的で導入された。それは、オノマトベにおける母音素素のはたらきとしては第二義的である。

本研究の第二の目標は、オノマトベに導入された子音素素がどのような順序原理にしたがってオノマトベのなかに配列されるかを説明することである。

オノマトベの本質は„*lautmalend/lautnachahmend*“であることなのであるから、導入された子音素素の配列もまた音源の印象を言語音を以て再現しうる範囲内で音源に忠実に行われる。すなわち、音源の音響現象としての基本特徴を表す子音素素はオノマトベの冒頭に置かれ、同時に音源の音響現象の始発形態をも表す。その他の子音素素は、音響現象の時間的展開に沿った順序で配列される。そして、そのことを通して子音素素の連鎖は全体として音源の再現に寄与する。例えば、*schnurren*: [ʃnʊr'ten]における*/ʃ/*は音源の音響現象の基本的特徴が「空気の排除」であることと、このオノマトベの音源となった音響現象が「空気の排除」から始まることを「音のジェスチュア」によって表し、*n*/は「空気の排除」に「軽い抵抗」が付随することをおなじく「音のジェスチュア」でもって表し、*r*/は「空気の排除」が「軽い抵抗」を伴いながら「持続」という終末形態へと続くことを、これまた「音のジェスチュア」でもって表す。

本研究では、このような音素導入契機と音素配列原理を収集したオノマトベの一個一個について検証した。その際、ラングとして認められていないがコミックスなどで「擬音語／擬声語／擬態語」として使われたオノマトベは、ラングとしては認められていないものの、子音素素導入の契機に関しても、オノマトベの内部での配列原理に関しても、オーソドックスなオノマトベに忠実になっていることが認められた。

論文審査の結果の要旨

本論文はドイツ語のオノマトベを対象に、個々の語がなぜその音形をとるのかを音素導入契機と音素配列原理という観点から考察したものである。

本論文の特色は個々のオノマトベの音素導入契機として「音のジェスチュア」「音模倣」というふたつの要因を考える点である。「音のジェスチュア」とは「空気の破裂的な排除」というような音響現象のイメージを、調音器官の閉鎖と開放、顫動などの運動によって再現、模倣することを意味し、そのイメージ再現にふさわしい調音運動により生成される音が当該のオノマトベに使われると考える。著者は辞書記述を手がかりとして、オノマトベを構成する子音の導入契機はこの「音のジェスチュア」であるという仮説を定立する。これに対し、ある音響現象をそれと類似すると感じられる言語音によって直接的に再現する作用を「音模倣」と呼び、音のジェスチュアとは質的に異なる音素導入契機ととらえる。そして個々のオノマトベを構成する母音はこの「音模倣」が導入の契機になっているという仮説を定立する。

本論文では有力な辞典7種における膨大な量の語源記述の精査から得た「慣行的オノマトベ」約400と、日本のコミックのドイツ語版の整理から得た「偶成的オノマトベ」500の二つについて上記の仮説が丁寧に検証され、全面的に妥当であると結論される。オノマトベの音素導入契機がこうした原理で説明できるとするのが本論文のひとつの重要な主張であり、独創的な見解である。同様の手法により、オノマトベ内部の子音は対象となる音響現

象の時間的展開に沿った順序で配列されているという仮説が立てられ、その妥当性が資料の検証により示される。

本論文が提示するこの画期的な研究方法論はドイツ語にとどまらない一般性を持つ。それゆえ今後の諸言語のオノマトベ研究の一指針となるものであり、本格的な研究の少ないこの分野における貢献は大である。また本論文の成果はドイツ語の一般的な認知パターンの解明への手がかりともなるものである。さらに、本論文で収集され分類整理されたオノマトベの情報は教育面でも高い価値を持つ。以上により本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。